

平成24年度 外部評価委員会議事概要

1：日時 平成25年3月13日(水)

2：場所 松江工業高等専門学校 会議室

3：出席者

外部評価委員

高等教育機関関係

竹内 潤 氏 島根大学 理事 副学長
大庭 卓也 氏 島根大学産学連携センター長

地方自治体関係

山根 泉 氏 財団法人しまね産業振興財団 副理事長

地域教育関係

塩川 寛 氏 島根県中学校長会長 松江市立第三中学校長

産 業 界

今岡 克己 氏 松江テクノフォーラム理事
株式会社ワコムアイティ 代表取締役

本校関係者

陶澤 真一 氏 松江高専同窓会 副会長

本校出席者

- 1) 井上 明 校 長
- 2) 高橋 信雄 副校長 (教務主事)
- 3) 黒田 祐一 副校長 (管理運営担当)
- 4) 荒尾 慎司 校長補佐 (学生主事)
- 5) 森田 正利 校長補佐 (寮務主事)
- 6) 田邊 喜一 校長補佐 (専攻科長)
- 7) 高見 昭康 教務主事補
- 8) 宮下 眞也 学生主事補
- 9) 飯島 睦美 学生相談室長
- 10) 伊藤 義雄 事務部長
- 11) 塩田 芳夫 総務課長

4：日 程

開 会

1. 校長あいさつ 13：30
2. 委員長及び委員紹介 13：35
3. 本校出席者紹介 13：40
4. 松江高専の教育を取り巻く現状について 13：45－13：50

黒田副校長 (管理運営担当)

5. 本校における支援活動についての状況報告

- 5.1 学習に関する支援について 13：50－14：20

本校の概要と特色について	高橋教務主事 (15分)
学習支援について	高見教務主事補(10分)
専攻科学生への支援について	田邊専攻科長(5分)

【質疑応答1】 14:20-14:30

休憩

5.2 学生生活への支援について 14:40-15:05

キャリア支援・就職支援について 宮下学生主事補(10分)

寮における学生支援について 森田寮務主事(5分)

学生相談室の活動について 飯島学生相談室長(10分)

【質疑応答2】 15:05-15:15

6. 委員のみによる意見交換 15:15-15:20

7. 委員による講評 15:20-15:30

8. 校長謝辞 15:30

閉会

5:議事

松江工業高等専門学校外部評価委員会規則第5条第1項により、委員長に竹内島根大学理事を選出した。竹内委員長の開会挨拶後、井上校長の挨拶があった。

本日は皆様方大変お忙しい中、松江高専の外部評価委員会にお越しいただきまして、まことにありがとうございます。私は昨年の4月に松江高専に校長として着任しまして、早いもので1年になります。どこの組織でもそうですが、高専は高専なりに色々な側面や活動があるのだなと思っているのが実感です。必要な人的資源、その他の資源を用意し、学生は大体1,100人近くになりますが、その教育指導ですとかあるいは専門性を高めていく、なおかつ特性を活かして社会貢献を果たしていくというようなこととさせていただきます。もちろん学校の管理も重要な側面です。その中にはマスコミに、良い面も悪い面も取り上げられているようなものもあります。そのような中でも、地域社会の方々あるいは地域産業界の方々に、一応のご理解を得ていただいているというのは大変ありがたいことだと思っております。

本日は全体のテーマといたしまして、重要な側面であります「教育活動」を取り上げ、どのような学生支援をしているかということに焦点を当てながら説明をさせていただきます。後程また説明がございませうけれども、学生の学力幅が近年拡大しております。それに伴いまして、特に低学年からの基礎的な学力、これを身に付けさせていくよう努力していこうとなったのでございます。その中には、5年間一貫教育ですので色々な年代の学生がおりますから、そういうことを活かしながら学び合いというような形できちんとした学習支援というような取り組みもしております。また、そういうことが高学年になってからの卒業研究、あるいは専攻科に進学した後の特別研究、そういうものに活かしていければと、このように思っています。

志願者の確保というのは入口で、私どもにとりまして重要なことなわけですが、学生の支援ということになりますと、出口に向けて適切な進路選択を要することで、色々な中での指導をしているというような状況でございます。特に就職の件につきましては、高等専門学校はかなり有利ということで、それ自体はおかげさまで変わりはないのですが、近年そう甘くないという状況になって来ておりますので、そういうことも情報としてお知りになっていただければと思っております。

学生生活全般につきまして努力はしているわけですが、最近では学生相談室を訪れる学生も多くなってきております。その一方で、発達障害の学生というものが目立ってきておりまして、そちらへの対応ということに意を注ぐというような状況もありますので、それにつきましてもお知りいただければと思

ます。

それから学生生活支援の大きな柱であります学生寮ですけれども、そこでもやはり学び合いというものがあります。色々改修をしておりますけれども、一番古い建物が今度は改築というよりは新築の建物になりまして、そういう意味では特に重要であるというように思っております。後程また状況説明をしながら、自由にご意見を伺って、私どもの今後の基本構想に取り入れてまいりたいと思います。

さらに、再来年度が開校 50 周年ということになりますので、各方面で私ども想像もつかないような努力を継続しなければならないと思っておりますので、皆様方のご理解ご協力をより一層賜りたいと思っております。本日はどうぞよろしくお願い致します。

引き続き、委員の紹介、出席者の紹介があり、竹内委員長から、日程について説明があった。

松江高専の教育活動～さまざまな学生支援について～資料に基づき下記のとおり本校から説明があった。

- ・「松江高専の教育を取り巻く現状について」 → 黒田副校長（管理運営担当）から説明
- ・「本校の概要と特色について」 → 高橋副校長（教務主事）から説明
- ・「学習支援について」 → 高見教務主事補から説明
- ・「専攻科学生への支援について」 → 田邊校長補佐（専攻科長）から説明
- ・「キャリア支援・就職支援について」 → 宮下学生主事補から説明
- ・「寮における学生支援について」 → 森田校長補佐（寮務主事）から説明
- ・「学生相談室の活動について」 → 飯島学生相談室長から説明

松江高専の説明後、以下の意見交換・質疑応答等があった。

○：委員の質疑・意見等 △：本校側の説明・意見等

○ 高専の学生さんは、私の印象だと中学校でも非常に優秀な生徒さんが来ているというように思っているのですが、その辺の評価はどうでしょうか。また若い人を見ていて、やはり自立的に自分の頭で考えるということが極めて弱いような気がします。もう少し自分で自主的・自立的に考えるところがあったら良いのということがしばしばあります。それはおそらく、長い間の若い人の意識の形成過程で培われてきたのだらうと思うのですが、先生方が高専の学生をご覧になって、自立性というのがひとつ欠けているなということが傾向として最近あるのかなのか、その辺を教えていただきたいと思っております。

△ やはり過去に比べて随分欠けて来ているなという気がします。ひとつは卒業してどうするかという進路選択の時に、昔はあまりキャリア教育とかはしなくても学生がそれなりに考えていたのですが、今は迷っている学生が非常に増えています。そこで、本校も来年から後程説明しますが、宮下教員が室長になってキャリア支援室というのを立ち上げ、本格的に5年間を見据えたキャリア教育というものに取り組みざるを得ないということがあります。

それから、学習支援ということで止むに止まれず色々な方策を取っているのですが、そうすると甘えてくるのですね。夏休みに出て本当の意味での力をつけよう、というのが基本的なスパンだったのが、「出たら単位をくれるんでしょ」みたいな感じの甘えが出ているということで、どこまで支援をするのか、どこで切り離すのかという問題があります。ある意味であまりにも手厚くやると、その自立性を損ねているのではないかという気もしています。私のほうからの説明は以上です。

△ 例えば部活とか学生会の活動とかそういうところでリーダーシップを発揮して、失敗を繰り返しながら色々なことを学んでいくという側面もかなりあると思うのですが、昔に比べるとやはり、運動系の部活に入る率が下がるというようなことがあります。学生会の活動にしても、自分からもどんどん引っ張るようなところが見られないとか、あるいは、外部との比較とか交流が無くて、狭い世界でわりとまと

まりやすいのでどうしてもリーダーシップ的なところが欠けやすい。昔から言われていましたけれども、確かにそういう傾向は最近より強まっているようです。そういう点をカバーするために、3年生までは高校並に手厚くするけれど、4年生になったら教室も無いし担任もアドバイザーとあって、アドバイスをしてくれるだけで全部手を掛けて引っ張り上げたりしないという、かなりそこで差をつけるようにしているのですけれども、なかなか思うように学生は育って来ていないというのが私どもの感想です。

- 色々聞かせていただきありがとうございました。実際大学とは色々なところが違う高専だと思いますけれども、外側から見ていると十分立派だという印象があると思うのですけれども、色々なところできめ細やかな指導と言いますか、3年生までは特に手厚くやっておられるという感想を持ちました。

そういう中で一番印象に残ったのは、先輩が後輩を教えるシステム、いつからやっておられるのか分かりませんが、そういうところは非常に学生にとって学び合いになり、先輩も、教える側も教えられる側もすごく効果的ではないかなと思いました。中学校でも、3年生が1、2年生に教える機会を意図的に設けるといふところがあるのですけれども、これは高専の中でやっているというところが、素晴らしい取り組みだと思っています。おそらく、色々な報告がありましたけれども、すごく充実した時間を過ごしているのではないかなという感想を持ちました。

それから気になったことは、発達障害という学生がどれだけの数か分かりませんが、ご承知のように小学校・中学校でも、通常学級に在籍する発達障害を含めた色々な支援、特別な支援が必要な生徒に対してのケアを、どうしていくかというのが非常に大きな課題です。6.7%ぐらいの生徒がいるというデータがありますが、間違いなく、それに近い生徒はどこの学校でもいるのではないかと思います。小・中学校では通級指導教室という形で、拠点校と言いますかそういうものがあってそこへ通ったり、専門の担当が近くの学校を訪問したりしてケアをしているのですけれども、なかなか数が多いものですから、ケアも出来にくいということがあります。学習支援というよりもカウンセリングを含めた形で、そういう心の安定といえますか、そういうところで大きな役割を果たしていただいていると思っています。

おそらく今度、県教委のほうも高校にもモデル校というか、そういう形で配置するというのを聞いています。高専のほうでもそういう形でこれから、おそらく間違いなくそういう学生は増えてくると思われまので、小・中学校はもちろんですけれど、高専でもこれから大きな課題になってくるのは確実だという気がしております。相談体制とか色々あると思うのですけれども、やはり専門職と言いますか、そういう方の配置とか、我々が苦勞をしているのは、発達障害の支援に対する医療との関わりがなかなか進まないという状況がありまして、今、現場としては大きな課題であります。高専のほうでもこれからそういう課題がたくさん出てくるのではないかなというのが感想です。

- △ そのことも含めて後半にご説明させていただくことにします。

- この間、米子の全日空ホテルを会場にして、鳥取県と島根県の経済同友会の勉強会がありました。そこで地域の大学の先生に参加してもらって、産業界が望む学生像とか、あるいは大学がこれからどういう人材を生み出していくかということのパネルディスカッションや、島根大学の副学長、鳥取大学の先生が出席されて講演会がありました。その場で産業界からは、最近の学生はなつとらんとか、コミュニケーション能力がないとか色々なことを言われ、そんなことは家で教育してくれ、そんな話を言われても困りますよ、などといったことを大学の先生がおっしゃったりというやり取りがありました。

その中で〇〇先生が、産業界からの色々な声のある中ではっきりその場で言われたことが、「大学というのは産業界にとって役に立つ人材を育成する機関ではない、それは明らかである。」という言葉でした。また、「私たち大学としては、健全なる市民そして健全なる消費者を育てる。」ということをはっきり言われましたので、とてもそれは素晴らしいなと思いました。あの状況でよく言えたな、という感想でしたが、非常にはっきりしたことを言っておられました。

当日その中で、これは高専の先生方も知っておられると思うのですけれどもうひとつ、大学の先生方は、民間の企業や就職ということを見ていないことはないけれど、それはとてもうざったいものと思っ

ているということです。要するに、大学の先生の評価というのは、いかにたくさんの論文を出したか、研究したかということでの評価であって、地元の産業界と少しでも付き合っていることが良いということでもないのも事実です、と言われたのです。もちろん大学を否定しているのではなくて、それは本当だと私が思っているから言っているのですけれども。高専の場合は、学校というものについて、地元の産業界が即戦力として欲しいという要望に応じていこうとしておられるのか、さきほど言ったような大学の姿勢とどう違うのかということをし少し教えていただけたらと思います。高専の先生方の評価が、大学の先生のように研究論文をいかに出したかが評価なのか、いかに教育に貢献したかによって評価されるかということなど、さきほど私が申しあげたこととの対比を教えていただきたいと思います。

△ 実践的な創造性を持ったエンジニアの養成というのが高専にはあるわけです。そういう面で、古い意味の「社会人として恥ずかしくない」と言いますか、きちんと行動のできる人間を育てていくということは、何よりも基本にあります。大学において勤労を前提とした社会人の育成というような観点があるのかどうかというのはちょっと分かりませんが、高専はその点は明らかにあると思いますので、その辺りは違うところがあるのかと思います。

それから、教育の活動につきまして、これは皆さんお分かりいただけると思いますけれども、大学と比べて高専はかなり知恵が要ります。例えば下のほうの年次の、高校生レベルの指導もしなければいけないし、それから社会連携活動もかなり地域に密着した形で進めなければいけないというようなこともありますので、これをすると論文に繋がるかどうかというようなことは、おそらく大学のほうは先生方がかなり強く日常的に意識しておられる面が、あるいは高専よりも強いのではないかと思います。その点はかなり違うと思っています。

△ なかなかそのシーズを作り出すというところは大学のようにはいかなくて、我々はある程度応用的なものでニーズを取り入れたような形で、共同研究などを行っています。私たちは教育理念にしても教育目標にしても、エンジニアを作るということを明確に出していますから、それは私どもの学校がもっとも社会貢献を出来るのは地域社会に優秀な学生をいかに出していくかということで、その学生は何かと言うとエンジニアの卵たちということですから、かなり大学とは違う、教育機関ではないかと考えています。

○ それを受けてなのですけれど、うちの会社に高専の学生が来てくれるようになってから、ようやく15年くらいになります。会社ができて20年くらいになるのですけれども、その過程で15年も学生たちを見てみると、即戦力で本当に素晴らしい、真面目な優秀な学生です。ですが、その学生たちが将来この会社の社長になってほしい、と言える人材がいるかということ、ちょっと希薄なのです。逆に大学から来た人が、やっぱりリーダーシップを発揮して、「お前に頼むわ。」みたいな人が出て来ているのです。その違いは何なのかと思うのですけれども。島大の学生とか、高専の学生、高校生と一緒に遊ぶ、ボランティア活動をする機会が多いのですが、やはり活発に出て来て頑張って、「一緒に田植えでもしましょう。」と言うのは島大の学生なのです、明らかに。学部の違いもあるかもしれませんが、幅広いですから。「東北の支援に行こうじゃないか。」と言って、実際に車を借りて出かけて、帰ってきたりするのはやっぱり大学の学生だったりします。高専は、もちろん年齢層が違うということもあると思うのですが、そういう意味で地域に出て行っていないところが、ちょっと残念に思っています。学校の中で教えているだけでは難しいかもしれませんが、是非、色々な機会に、地域に出て来てもらえば距離が埋まるし、社会性と言うか、何かを身につけるような場面を作ってもらって、そういうバランスが身に付くというか、もっと将来に向けて期待できると思うのですけれども、その点が気になることではないかと思ったりしました。以上です。

○ 最後にもう一度質疑応答ありますので、今の前半の件も含めて、最後のところで少し時間を取ってまた質疑応答をさせていただきたいと思いますので、しばらく休憩させていただきたいと思います。

○ 今、障がい者、学習障害、そういう方のお話を伺いましたけれども、これは多分高専だけの問題ではなくて、大学においてもこういう学生が増えています。私はそういう印象を持っているのですが、例えば現実の就職という話をすると、社会の受け入れ態勢がどうかといったことですが、そういったお話について伺いたと思います。それから、先程あったご両親の理解が、これは支援を受けてというような話になりましたけれども、ご両親の思いがとても強くて、普通の子に縛りつけている、そういうご両親が実はおられて、そうすると、支援を受けること自体を嫌がられるのですね。高専だけの問題じゃないのですけれども、そういう方に対して支援するというのは、なかなか難しいのかなという気がしているのですが、その辺どういうふうに、連携をとっておられるのでしょうか。連携というところが、きめ細かな支援ということがなかなかしにくくなる部分で、しかも両方、バランスがだんだん難しいところになっていく気がするのですが、その辺どのようにバランスを取っておられるのかお聞かせください。

△ まず保護者の障害受容なのですけれども、実際に時間を掛けてやっています。一番最初は、私どもからお母さんにアプローチを取らせていただいて、お母さんにゆっくりやんわり、じわりじわりとお話をさせていただいて、そして次に本人を含めた形でお話をし、そして最後にお父さん、一番難解なお父さんといったことになることが多いのです。まずお母さんは、やはり小さいときはずっと一緒にいらっしやいますので、大体こういった発達障害は3歳児検診ではっきり分かっていわれているのですけれども、発達障害を抱えておられても発達はしていられるわけですので、「あ、次はこれができるようになった。」と、親の気持ちとしては、「がんばってもうこれができるから大丈夫。」というような形で過ごしてこられたということが多くて、ざっくばらんにお話をさせていただくと、お母さんのそういった思いが出てきたりします。それで、今というよりはこの子が社会に出た時に、とにかく自立させるということに重点をおいてお話をしていくのですけれども、その際に先程も申しましたように教育機関や私どもだけの力ではなくて、うちはウィッシュさんなど、支援センターのほうとも連携を取らせていただいて、そちらのほうに、例えば保護者の方が面談にいらしていただいて、相談をしていただいていることもあります。確かに先生のおっしゃるようきめ細かい連携ということになると、なかなかお互いに情報を共有し合っているといたところが不十分かもしれませんけれども、ただ学校で出来ないところを支援センターにお願いするなど、そういった形で進めていくという認識でおります。

○ 難しい問題なので、ここで話をしただけですぐ答えが出てくるものではないとは思いますが、ますますそういう問題が多くなっていくかなという気が少ししています。

○ 私は、県内全域の教育機関、色々なところを見てきたつもりですけど、これほどまで地元の、ウィッシュなどとタイアップしておられる教育機関は、県内には他にありません。そこまできちんと対応しておられるのは素晴らしい。でもそこに至るまでの、受験のときに、受験では障害が発見出来ない。もしそのときに、面接などで発見出来ていたとしたら、では入れるのか入れないのかという問題もあつたりしますから、難しいのですけれど。それから今度は受け入れる会社の、企業の中にも同じことがあつて、受験、面接もやりますけれど、試験だけでは発見できないということがあります。

今回のような話を聞いて、素晴らしい取り組みをやっけてらっしゃるということに、本当に敬意を表したいと思います。先ほどのお話で、障害者手帳を持てば、就職のときも企業としては受け入れやすくなります。

- そういたしましたら全体の印象をお話して、あとで補足していただきたいと思います。

今回、学習に関する支援と学生生活への支援ということで、本当に色々な取り組みをご紹介いただきました。特に現在の色々な問題点、学習習慣が学力的にも劣ってきている学生に対しての学習支援。あるいはコミュニケーションに欠ける学生の多い中でのキャリア支援、就職支援。それから発達障害の方への色々な細部にわたる取り組み、その辺りについて特に説明をしていただきました。最初の学習支援のところでは印象に残ったのは、L/T 演習ですか、そういう非常に意欲的な取り組みをなさっておられることと、また、専攻科については特別研究や学位授与機構への申請に向けた取り組みで、非常にきめ細かい指導をしておられる。それからキャリア支援、就職支援でも様々な取り組みをされていることです。

本当に色々な、素晴らしい取り組みをしておられるのですが、島根大学のほうにおられますので、そういうところから見ると、島根大学ではもちろん似た取り組みは全てあるのですが、高専の場合、それを全て、2年ぐらい前からやっておられるということに感心しました。L/T 演習と言っても島根大学では大学院生が同じような形でメンターという役を与えて、授業以外のところで学習室に集めて色々な下級生の指導をやったりしています。取り組みとしては、島根大学で言うと大学院の修士課程でも同じような取り組みをしており、何回か途中で発表させて、きちんとした論文にまとめさせてというようなことがあります。それを2年ぐらい前からしておられる。就職活動でもそうですよね、1年生の時ぐらいの時から就職活動に一生懸命取り組んでおられる。そういうことで、それで上手くいけば本当に力をつけていって、所謂人間力にしる、専門力にしる付いてくる学生も、十分対応していく方、たくさんおられると思うのですが、やはりこれだけずっときっちりやっていると、なかなかついていけない学生というのも出てくるのではないのでしょうか。大学の場合は、やはり最初1・2年の時に多少自由が利くというような時間がある、3・4年で社会に出て行くために、あるいは大学院に入って研究をまとめたりというようなところを、高専では高校に入る段階からきっちりやっておられるところで、最後の相談室の話とも多少繋がるのですが、中には色々ついて行けない学生も出てきかねないかなという気がしました。きっちりすればするほど、出てくるのだなという印象も持ちました。それぞれの今の取り組み、どれも素晴らしいので、さらにどんどん進めて行っていただきたいと思いますが、最後に学生相談室と言いますが、その辺の取り組みは本当に重要なものだと思います。今もかなりきっちりしておられますけども、今後ともそこは色々な取り組みを積み重ねていただきたいという印象を持ちました。

あとはそれぞれ質問していただいたらと思います。

- 私が今日感じましたのは、教育というのは非常に難しいものだと率直に感じています。私の場合は37年前に高専を卒業していますけれども、会社生活を終えて、これからどちらかという、後輩に次の世代に渡していこうという状況になっているのですが、その37年前のことを考えると非常に様変わりしたと思います。当時は教えてやるから後は勉強しろ、後は成績が良くなろうと悪くなろうと自己責任だと、寮でも叱ってくれる先輩がもちろんいますが、ある程度自分たちのスタイルを出していくという形ですが、そういう意味では自ら学ぶ力といいますか、何かをやるためにどうするかというところが何となく5年間の中に蓄積してきたのかなと思います。社会に出てからは、学校で勉強したことというのは、学ぶ力を養ってもらったということで、実際に勉強した授業の内容が直接役立つということではなかったというのが素直な感想なのですが、

今の状況というのは、入学してきた学生をきちんとした形で社会に送り出す。言い方は悪いのですが、ルールに乗せて良い状態で送り出してあげますよというようなところが変わってきている。逆にそれをどうやってやるかという、教育指導とか生活支援とかが非常に問題になっているのだという意味で、非常に様変わりしていると感じました。

どなたかがおっしゃっていましたが、学生が何歳ぐらいのタイミングの時にどうやってこういう状況から突き放して自分たちでやれるようにするかということ、この切り替えが非常に難しいとおっしゃっていたと思うのですが、そういう意味では高専にいるうちに、最後にはやはり自分で学んで乗り越えていけるようなところもトレーニングしていくということがこれから求められる、大切なことかなと思います。どのように教育あるいは学習支援をするかということも非常に難しい話で、私たち

素人では分からないことでもあるのですが、社会に出て仕事をして、最後次の世代へと引き継ぐということを考えていくと、やはり1人1人の人間力をどのようにして育てていくか、このようなことが非常に、今日のテーマの学習支援それからキャリア支援という中で考えさせられるというように思います。大変勉強になりました。ありがとうございました。

- この間、NHKの全国ニュースで、電気工学科の箕田先生が出ていらっしゃいました。本当に高専の先生たちの研究というものも全国的に評価されていて、いつも素晴らしいなと思って見えています。また別なところで箕田先生などは、子どもたちとの「科学振興」というような形の活動をされていまして、本当に敬意を表します。高専全体のそういう姿勢はいつも色々な場面で伝わってきて、素晴らしいなと思って今日も見させてもらいました。

iPS細胞、ノーベル賞を獲ったからというのもあるのですけれどもものすごい予算が付いて、それはそれで拍手していたら、今回聞く声では、他の研究予算が削減されてiPSに回されているケースも多いということを聞いて、「それは違うだろう。」と私は思っています、そこだけが増えて他から持ってくるのはまだしも。先程の箕田先生のそういったところの予算も、1,000万円といっても半分に削られているのではと思います。そういうことが、もし学校内の色々な部門で他でも発生しているのであれば、それはおかしいということは、後々産業界としても色々な形を通じて訴えたいと思います。もしもまた何かあったらお話してください、以上です。

- 最初からリーダーシップというか、自ら学ぶ力というのが一つのキーワードになっていくのかなというように思いで聴いていました。教育は資質が大事になる、と、とても逆説的な言い方なのですが、システムが揃えば揃うほどリーダーシップが育たないし、自ら学ぶ力が欠けてくるのかなというように、そんなことをとても感じました。

それから、いかに理科が好きな学生がいても、理科の教え方がどんどん洗練すればするほど、学生たちが自分たちで考えるということがどんどん無くなって行って、単なる物知りになるのではないかと、思いました。我々としては、次の世代の子供たちが、自分たちで何かを発見してくれる、次の日本を引っ張って行ってくれるような学生であって、総合性を発揮してくれることを期待するのですが、実は知識だけ大きくなって、その部分が欠落してくるのではないかと、そんな不安も少しあります。ですから、その辺をうまく時には突き放すというようなバランスも必要なんだろうなというように思いも、大学を見ても思いますし、今日色々高専のスタッフのお話を伺っていても感じました。

- 今日のお話を伺いまして、非常に印象深いことがありました。それは先程の発達障害への支援・教育もそうですし、キャリア教育もそうです。他の関係専門機関との連携をよくとられているな、ということが非常に印象深いところでした。もうひとつ連携と言いますと、やはり地域との連携ということが重要だろうと思います。これは要望になるのですが、そういう面で高専の組織自体、先生方は地域との連携がきちんと出来ていると思っています。ですが、学生個人の地域との連携ということが、これからひとつの課題になってくるのではないかなという気がしています。1年生、2年生は、まだ幼いですからなかなか難しいかも分かりません。3年生、4年生、5年生あるいは専攻科生ぐらいになると地域へ個人として出て行って、地域の人との関わりを持つということも非常に大切なのではないかなという気が私はしております。その中で、高専としてももの作りを子ども達へ教えてあげるといった試みをされています。我々としても非常に嬉しい話であり、そういうことを何かもう少し発展させて、高専の学生が子ども達、地域の子供達にももの作りの楽しさを直接教えるという試みを出来ないかなという気がしています。我々の財団の関係機関で、発明協会というのがありますが、発明協会のほうで、今年度地域でそういった試みをされる場合に、少額ですけど材料費などを何とか支援しようではないかということを中心に計画しています。そこで高専の学生たちが、もし実施されるのであれば、そういったものにも使えますので、カリキュラムでやられる場合は当然学校の予算で出るかも分かりませんが、そういったところでもお手伝いができるような仕組みを作っておりますので、ぜひとも今後は組織だけでは

なくて、学生たちが外に出て行くということも少し念頭に置いてご指導いただければというように思っております。以上です。

○ 今日のお話を聴いて責任を感じているところです。ゆとり教育といいますか、生きる力を育むということで、その場にいますけれども、今の学生たちはその学習指導要領に則った教育の申し子と言いますか、それが今の色々な話の中でリーダーシップが、自主性、主体性が培われてないというような現実があるということで、非常に責任を感じているところです。自分で気づき考え行動する力、その中で培ってきたある感覚を、中学校の時もやってきたとは思うのですけれども、実際のところはそれがなかなか結びついていないのかなというように感じまして、責任を感じているところです。

もう1点は、家庭学習の話もありましたけれども、全国学力調査の結果を見ても中学校の場合、全国的に中の上というところに位置している成績なのですが、実際家庭学習については一番下の次ぐらしいの立ち位置で、その辺のところを、やらせる教育から自主的な家庭学習に取り組むという、その辺をもう一度見直ししていかないと高校、高専、大学に繋げていくにはそういうところが大事なところで、反省をして責任を感じているところです。

最後に、最初に言いましたけれども、本校生徒の病弱、筋ジムの生徒が来年度から入学することになりまして、そのために、初めてということですが介助人の方を配置していただいたり、施設等についても色々ご配慮いただきまして本当に感謝をしているところです。直接学校にまで足を運んでいただきまして、その辺のところを、一生懸命取り組んでおられる状況のひとつかなと私個人としてはそう思っています。どうもありがとうございました。

○竹内委員長

それでは最後になりますが、高専を代表して、井上校長の方からご挨拶を頂戴したいと思います。

△井上校長

本日はどうも有難うございました。私どもの時間配分が悪く、先生方に本当にご迷惑をおかけして申し訳ございません。先ほどいただきましたご意見、またそれをきちんと含めて協議していきたいと思えます。引き続きご理解、ご協力のほどをお願い致します。本日はどうもありがとうございました。

○竹内委員長

それでは以上を持ちまして、平成24年度松江工業高等専門学校外部評価委員会を終了いたします。ありがとうございました。